

首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」

首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」は、2019年度も多くの方にご利用いただきました。大学の国際化が進むのと軌を一にするかのように、首都大KIDSの利用者も国際色豊かになっています。4月から幼稚園に入園したり、認可保育所への入所が決まったりして、首都大KIDSから「卒園」するお友達もいます。少し寂しい気持ちもありますが、これも子どもたちが大きくなった証と考えれば、めでたいことですね。首都大KIDSにも、また新しいお友達が来てくれることを願っています。施設見学や体験入園も受け付けていますので、ダイバーシティ推進室までお気軽にお問い合わせください。

※4月から施設名を「東京都立大学一時保育施設」に、愛称を「都立大KIDS」に変更します。



ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。首都大学東京ダイバーシティ推進室一時保育施設のページ

https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/day_nursery/day_nursery.html

ダイバーシティ推進室WEBサイトリニューアル

ダイバーシティ推進室のWEBサイトでは、本学のダイバーシティ推進の取組に沿って、男女共同参画の推進、障がいのある構成員支援、多様性を踏まえた構成員支援、セクシュアル・マイノリティ支援のページを作成し、それぞれの事業に関する情報を掲載しています。また、相談や一時保育施設などに関する情報も掲載しています。

このたび、WEBサイトのさらなる利便性の向上を目指して、リニューアルを行いました。これまでに比べ、画像を多用して視認性を高めたほか、トップページに開催予定のイベントなど新しい情報を掲載することで、より情報を得やすいスタイルになりました。

また、ダイバーシティ推進室の所蔵図書一覧の紹介や、ダイバーシティ推進室の様子を伝える「ダイバー日記」などの新しいコンテンツも掲載されています。このニュースレターのバックナンバーも、すべてWEBサイトから読むことができます。



ダイバーシティ推進室WEBサイト：<https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/>

コラム ダイバーシティ推進室 特任研究員 横山家の育児

1月に男女の双子は1歳を迎えました。この間、ハイハイからつかまり立ち、そして歩くようになり、より一層賑やかな生活になりました。女の子は私を求めることが多く、私を見つけると、手招きをチョイチョイしながら寄ってきます。しばし膝の上で落ち着いた後、また歩いて遊びに出ていきます。部屋の片隅で一人遊び、二人遊びに熱中しているので、ちょっとだけ、と部屋を出てしまうと大変です。扉に駆け寄ってきて大泣きです。

私たちのことを気にせずに遊んでいるようで、気にしているのですね。今は中々離れられないですが、あっという間に大きくなり、部屋を出て、家を出て、私たちの知らない世界で過ごすようになるでしょう。しかし、疲れた時にちょっと膝の上で休んでいくように、見えなくとも私たちの存在が彼らの支えでありたいものです。(横山)



ダイバーシティ推進室マーク



ダイバーシティ推進室では、認知度の向上を目指し、シンボルマークを作成しました。大空へはばたく鳥をメインのモチーフとし、翼の部分は「情熱を燃やす」イメージから、炎をかたどったデザインとしました。

複数のデザイン案から、職員と支援スタッフの投票で選ばれたこのシンボルマークは、ポスターやパンフレット、講演会のチラシなど、ダイバーシティ推進室が発行する印刷物に掲載されます。このマークを目印に、ダイバーシティ推進室の各種イベントにご参加いただくと幸いです。

首都大学東京 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
電話：042-677-1337(直通) / 内線2571 FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：<https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/>
発行日：2020年3月31日

編集・発行

編集
後記

年明けの春節の頃から「新型コロナウイルス」が日本へと押し寄せてきました。前代未聞の出来事にすべての人々が影響を受けましたが、特に卒業生たちは式典も中止となり、心を痛めたことと思います。それでも桜は人々の新たな門出を祝うように咲いています。ダイバーシティ推進室はこの春、新しくマークも作成し、WEBサイトも一新しましたのでぜひ覗いてみてください！(兼子)

TMU
DIVERSITY
PROMOTION
OFFICE



No.26 March 2020 Newsletter ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
首都大学東京

2019年度 第2回バリアフリー講習会

助け合うってどういうこと? ■■



1. はじめに

2020年1月16日(木) 牧野標本館別館TMUギャラリーにて、2019年度第2回バリアフリー講習会「助け合うってどういうこと」を開催しました。講師に骨形成不全症のコラムニストとして活躍し、プライベートでは2人のお子さんを育てている伊是名夏子氏をお招きしました。当講習会では、ペアワークを取り入れながら「支え合う」ことについて考察を深めました。

2. 学校での経験

骨形成不全症は骨の形成に関わる障がいです。伊是名氏は幼少期より度重なる骨折を経験し、医療機関と付き合いながらの生活であったといえます。小中学校は養護学校(特別支援学校)に在籍し、手厚いサポートを受けましたが、同級生が多い環境を求め、地域の公立高校に進学しました。バリアの多い学校でしたが、自身の働きかけや周囲の協力により有意義な高校生活を送ることができたといえます。

大学進学と共に上京し、在学中はボランティア活動や留学など様々な経験を積み、見聞を広めることが出来たそうです。特に留学したデンマークでは、電車等の社会インフラが障がいのある人も使いやすいように設計され、とても暮らしやすかったそうです。

3. 人生の節目でのバリア

大学卒業後、社会人生活を送る中で結婚を考えましたが、周囲の理解を得るのは容易くありませんでした。障がいのある人の場合、出産についても病院によっては受診を断られることもあり、結婚、出産など人生の節目でバリアを感じることが多々あるそうです。そのため、障がいのある人は「結婚したい、子どもがほしい」と考えること自体をためらってしまうことがあると指摘しました。

また、日常生活においては駅のエレベーター設置、施設のバリアフリー化は進みつつあるものの、大幅な迂回をしなければならなかったり、途中階からのエレベーター利用が困難であったり等、様々な制約があるのが現状と訴えました。

4. お互いが支え合う

伊是名氏は、日常生活を送る中で「障がいのある人の生活は大変そうだ」と考える人は多いが、誰かの助けになりたいという気持ちを持っている人も多く、と感じるといいます。最後に「より良い関係をつくるためには相手のことを知り、障がいのある人からも助けられてください」とまとめました。

5. 感想

・実体験を交えたお話を聴いて、自分で考えていたものが健常者の視点から捉えられたものであったのか、ということに突き付けられてドキッとした。

・最もハッとさせられたのは、「困っている人に助けてもらいたいと思ったことがありますか」という問いかけだった。「無知の姿勢で臨む」「助け合い」と言いながらも、どこかで感じていた矛盾を示してくれた言葉であった。

6. 所感

伊是名さんとは10年以上のお付き合いですが、その昔も「障がいのある人に助けられてください」という指摘に、目を見開かされる思いをしたものです。このことは障がい分野のみならず、ダイバーシティ推進室の取り組み全体に通じることでしょう。双方の豊かな関係を作っていきたいと思います。(横山)



このイベントの様子を収録した動画が、YouTubeの「首都大Channel」(4/1より「都立大Channel」)で公開されています。
<https://www.youtube.com/watch?v=pd220NB1FWc>

障がい者支援スタッフ・利用学生 振り返りミーティング



2月6日に後期振り返り会を開催しました。今年度は障がい学生の所属キャンパス移動に伴い日野・荒川キャンパスでの登録者が増加し、全体の支援スタッフ登録が約130名となりました。

意見交換では、「先輩がサポートしてくれ支援スキルが向上した」、「全国大会で実践事例を発表し、自分たちの取り組みを振り返ることが出来た」などの意見がありました。一方で、情報共有が不十分であった点やキャンパスによる支援環境の違い等の課題が挙げられました。

次年度の検討では、情報共有の促進のために科目ごとに新たなシステムを活用することや、講習会の内容を再検討すること等の意見がありました。学生の進級に伴い毎年異なる課題に直面しますが、柔軟に対応できるように、よりよい支援体制の構築に取り組みます。また、今年度は支援体制の基礎を作ったメンバーが卒業します。皆さんの益々のご活躍をお祈りいたしますと共に、これからも支援体制を維持していくぞ、と改めて身の引き締まる思いです。(横山)

障がい者支援スタッフ勉強会



1月14日に支援スタッフ勉強会を開催しました。この勉強会では支援スタッフが講師役となり、自身の経験や支援に対する考えを話してもらっています。今回は梅木雅恵さん(法学4年)です。梅木さんは転勤の多い家庭で育ち、10回近くの転校を経験したそうです。中学校、高校がろう学校の近くだったため手話に興味を持ち、大学入学後に友人と手話サークルを立ち上げました。また、社会に出る前に様々な人と関わりたいという気持ちから支援スタッフに登録し、支援活動に関わるようになりました。

当初は障がいのある学生にどのように接していいのか、手助けをしなくては、という気持ちがあったそうです。しかし、接する機会が多くなるにつれて、友人として対等に扱われるようになったといいます。最後に大学生活を振り返り「いろんなことにチャレンジしてください。やらない後悔よりもやる後悔を」と後輩にメッセージを託してくれました。梅木さん心に染みるお話をありがとうございました。(横山)

2019年度 文化的多様性を持つ構成員交流会 「書道体験会～ひらがなやカタカナにもチャレンジ～」



ダイバーシティ推進室では、外国籍の教職員や留学生が日本文化に触れる機会を提供することで、それぞれの間での交流を深めるとともに、日本人教職員や学生との交流も深めてもらうことを目的として、日本文化体験会を行っています。今年度は、外国人を対象とした書道体験会での経験が豊富な先生を講師に迎え、書道の体験会を実施しました。書道が全く初めてという留学生や、「筆を持ったのは小学校の時から」という日本人職員など、9名が参加してくれました。

会場となった7号館の和室には、壁面に講師のお手本や作例が貼りだされ、寺子屋さながらの雰囲気になりました。早めに来室した留学生の名前に、講師が漢字を当てて書いてプレゼントするなど、にぎやかな空気の中、会が始まりました。初めに講師が簡単な書道の歴史や日本の書道の特徴をレクチャーした後、書道体験に移りました。まずは横、縦の線を引くための筆運びや、止め、はね、払いなどの基本的な技法を練習。筆を持つことも初めてという留学生の参加者もいましたが、講師とアシスタントが会場を回りながら、一人一人に直接コツを教えると、短い時間ながら参加者はそれぞれに上達を見せるようになりました。

続いて、お手本の中から好みのものを選び、文字を書く練習を行いました。漢字の書き順がわかるよう工夫されたお手本を手元に、「幸福」「情熱」「美」などの字に挑戦しました。さすがに、はじめは見慣れない漢字に悪戦苦闘する参加者も見られましたが、書きなれてくるにつれてスムーズな線となり、それぞれの持ち味が反映された文字が次々に生み出されていくようになりました。本事業を担当したダイバーシティ推進

室の特任研究員も、子どもころ、書道が得意ではなかったと言いがら、個性あふれる文字をしたためていました。一方で、書道の心得のある留学生の参加者もあり、こちらは崩し字に挑戦するなど、それぞれの好みに応じて体験を楽しむようすが、随所に見られました。最後は色紙に清書を行い、そこに講師が落款を押して、参加の記念としていただきました。

体験の後には、講師が条幅に作品を書くデモンストレーションを行いました。軽やかな筆さばきで美しい文字を紡ぎだす講師の動きには、参加者から感嘆の声が上がりました。中には、その動きをスマホのムービーに収める参加者の姿も見られました。

参加者からは、「とても楽しい体験だった」「このような日本文化に触れる機会を継続してほしい」などの感想が寄せられました。担当の特任研究員も「今度は事前に練習してから臨みます」と語っていました。

(藤山)

このイベントの様子を収録した動画が、YouTubeの「首都大Channel」(4/1より「都立大Channel」)で公開されています。
<https://www.youtube.com/watch?v=raE5JZMjclM>



「変える、変わる」

ダイバーシティ推進室との出会いは、私がまだ黒髪だった1年生の頃。基礎ゼミナールの授業の1コマとして、ダイバーシティ推進室の職員さんと障がいのある学生が大学生活などについて話をしに来てくれたことがきっかけでした。そしてその出会いは、誰もが自分の想いに合わせて大学で学ぶということを考え直すきっかけを私にくれたものでありました。



大学に進学して学ぶということは、誰にとっても、もちろん区別する必要もないですが、障がいのある学生にとってもあるべきはずの選択肢の一つです。しかし、周囲の姿勢はどうでしょう。何か困難や障害がある時、その人がやりたいことをやるということに何故か人は有り難さを感じてしまう、そんな社会がある気がします。なぜ有り難いと感じてしまうのか。できないことだと思いついて入っているからかもしれません。

そんな社会の中で、有難いとされてしまうような、できるのか?と思われていることをでることに変わっていくパワーがダイバーシティ推進室にはありました。有難い反対にあるのは当たり前です。社会にとつての当たり前のカチを作り、社会に向けて発信していくダイバーシティ推進室での活動は、私にとつてもとても刺激的で、髪の毛が金色になってしまいました。

この素敵な場所で大々さんの素敵な人に出会えた有り難さは謙虚に感じつつ、活動に少しでも関わりたいことを嬉しく思います。たくさんのお会いをありがとうございます。

障がい者支援スタッフ
都市経営学部経営学系4年 神保彩乃

「マイノリティ」に学ぶ

私は幼い頃からピアノを習い、中高6年間は吹奏楽部に所属するなど音楽に親しんできました。そのため、音の無い世界というのは想像ができませんでしたが、好きな作家の小説に聴覚障がい者や手話に関する話が出てきたことから興味は持っており、手話講座を受けました。それがきっかけでダイバーシティ推進室に支援スタッフとして登録しました。パソコンノートテイクの支援が始まるというところで積極的に参加するようになり、その後も主に聴覚障がい学生の支援に携わっていました。彼はサークルの後輩でもあったので、様々な場面に居合わせることで、その経験は卒業論文のテーマにも繋がられました。



ダイバーシティ推進室には、障がいに限らず、様々なバックグラウンドを持った学生が、それをお互いに理解し合いながら集っています。障がいの有無に限らず、それぞれがマイノリティな部分を持っており、そこから自分には想像もできなかった考え方や世界の見方を学ぶことが出来ました。言い過ぎではなく、ダイバーシティ推進室での経験を通して世界の見え方が180度変わりました。今の社会では言葉にするのが躊躇われることでも、疑問に思ったことをそのままぶつけられる場があったのはとてもありがたいことでした。これから私は社会に出るようになりますが、ひとりでも「ダイバーシティ推進室」の良さを持ち続け、足元から広げていきたいです。

障がい者支援スタッフ

都市環境学部
自然・文化ツーリズムコース
4年 竹田彩夏

コラム

ダイバーシティとスポーツ ～ホストタウンで国際理解を～

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて、「ホストタウン」という取り組みが行われています。これは、大会に参加する国・地域の選手や関係者とホストタウンの住民がさまざまな分野において交流し、相互理解を深めることを目的とした取り組みです。2020年2月28日現在で487の自治体が名乗りを上げ、活動を行っています。

内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局の資料によれば、ホストタウンに求められる取り組みとして、地域住民と大会参加国・地域の選手や関係者、日本人オリンピック・パラリンピアンとの交流と、それに伴うスポーツの振興、教育文化の向上及び共生社会の実現を目指す活動があげられています(※)。具体的には、地域の食材を使用した料理で選手を歓迎したり、学校でスポーツ体験イベントを開催したりといった取り組みが行われています。

これまで、日本で開催されたサッカーやラグビーのワールドカップなどの際にも、代表チームのキャンプ地となった地域の住民と選手たちとの間で、同様の交流が行われていました。

スポーツイベントをきっかけとして、さまざまな国や地域のことを知り、交流を図る。ホストタウンの理念は、オリンピックの精神にも則ったものと言えます。しかし、これを一過性のものに終わらせるのではなく、大会後も継続することの方が大切だと言えるでしょう。ホストタウンの対象となった国や地域のことだけではなく、あらゆる国や地域のことを知ろうとする意識を持ち、私たち異なる社会や文化、価値観、規範などがあることを理解し、それらに敬意を払う姿勢を身につけることこそ、ホストタウンという取り組みが目指すべき点ではないでしょうか。

(藤山)